

木更津市史編さんだより

木更津の歴史・文化・自然再発見マガジン



発行者 木更津市教育委員会 教育部文化課

〒292-8501 木更津市朝日3-8-1 木更津市役所朝日庁舎

Tel:0438-23-5309 Fax:0438-25-3991 E-mail:bunka@city.kisarazu.lg.jp

第10号

目次

P1 市史編さん部会活動報告

P2 調査レポート

市史編さん部会活動報告

令和7年度の各編さん部会活動を報告します。

考古部会

史料編では古墳時代の掲載遺跡が百十四遺跡、奈良・平安時代は六十遺跡となり、地域ごとに紹介する予定です。膨大な量ですが、埋蔵文化財は国民共有の貴重な財産でありすべてを公開することが原則です。また、可能な限り多くをカラーで紹介することとしました。遺跡から発見された遺構や遺物は、カラーで紹介すると興味関心が極めて高まるからです。このため遺構のカラーライドのデジタル化や出土遺物の再撮影をできる限り実施しています。

中・近世の遺跡や城跡、陣屋跡などからも興味深い資料が得られています。木更津市では真里谷城跡や笹子城跡など、房総武田氏に関連する城の発掘調査も行われています。また、多くの石造物も残されており、併せて紹介する予定です。

古代部会

令和7年度は「史料編4 古代」の刊行をふまえて、通史編執筆の準備を行っています。

具体的には、改めて「史料編」に掲載した各史料を丁寧に読み、古代の房総、特に木更津市域の特色について考察しています。また、先行の『千葉県の歴史』や『袖ヶ浦市史』などの記述をもとに、具体的な目次案の検討を進めています。その上で、先行の房総地域の自治体史の記述をふまえ、最新の調査研究成果も生かしながら、どのような特色が出るのか、鋭意検討を続けています。

最終的には、古代の木更津市域の歴史を分かりやすく解説するとともに、「古代房総のなかの木更津市域」、「日本のなかの木更津市域」さらには「世界のなかの木更津市域」といった視点も取り入れながら、その特色を市民の皆様に分かりやすく紹介することのできる魅力ある「通史編」の記述ができるようにしたいと思います、準備を進めています。

中世部会

中世部会は本年度久しぶりにオンラインで部会を2回開くことができました。コロナ禍で中断し、そのまま停滞していましたが、今年度からふたたび刊行にむけての第一歩となりました。まず1回目は新たに加わった編さん委員の紹介と役割分担の再確認、2回目は刊行計画の見直しと役割分担の新提案が主な議題でした。特に2回目の部会で、刊行計画については、遅れている「史料編5

中世」の刊行について2028年度を目指すことで意見の一致をみました。次いで通史編の刊行を2030年度にすることも決定しました。個々の調査成果・調査希望では、金沢文庫文書の調査希望が出され、具体的な史料の明示があれば、調査に向けて事務局が確認していくことになりました。

近世部会

近世部会では、史料調査・整理作業、史料編の内容についての検討、令和8年度末に刊行を予定している『木更津市史 史料編6 近世1』に掲載する史料の翻刻（くずし字で書かれた原文書の文字を判読して当用の文字に直すこと）を中心に活動を行いました。

史料調査・整理作業で最も力を入れたのは、木更津村の名主などをつとめた重田家に伝来した重田家文書の整理、写真撮影です。多くの史料が目録未作成となっていた重田家文書は質量ともに厚重で、未整理の部分も残りますが、近世の木更津を知る上で大変重要な文書群です。史料編近世1・2にもできる限り載録してその内容を広く紹介したいと考えています。

重田家文書の整理の他にも、市内各所に伝来した近世史料の翻刻を進め、至徳堂関係の史料や、村々で作成された御用留、訴訟や訴願に関する文書、議定書、また信仰に関する

諸史料などの翻刻を進めました。

市史の「史料編6 近世1」の刊行を間近に控え、最後の追い込みにつながる一年となりました。

近現代部会

近現代部会では「史料編8 近現代1」の年度末刊行に向け、原稿執筆と校正に明け暮れる一年となりました。皆さんに質の高い市史をご覧いただくため、心血を注ぎ身を削りながら、納得のいくものを作り上げようとなりました。

民俗部会

今年も地元の方々の協力を仰ぎながら、地域での聞き取りや、寺院・神社での調査、石造物の調査や写真撮影など、さまざまな「民俗に関する調査や資料の収集」を行っています。海の仕事や農業のやり方、地域の中の「ズシ」（組のようなつながり）や屋号、人が生まれて亡くなるまでのいろいろな「節目」に行うこと、お寺や神社での行事やお祭り：「民俗」でうかがいたいお話や、拝見したい物は多方面にわたります。しまわれない古文書や道具類も調査しています。部会委員は月に一回、オンライン部会を開いて、日頃の調査についての話し合いや打合せを行っています。

自然部会

自然部会では刊行された「自然編 資料」については正誤表の作成を行い、刊行される「自然編 総論」については執筆担当やページ数割り当て、工程などを決定し、執筆を開始しました。

デジタル作業部会

令和6年度から発足したデジタル作業部会では今年度は7月と11月にオンライン会議を実施しました。会議ではデジタルコンテンツのターゲット層についてや搭載したい機能と内容、公表方法について検討しました。また、集積した資料データの保管方法についても協議しました。

レポート

市史編さんの中で今年度特筆すべきものについて編さん委員にレポートをまとめていただきました。

考古部会

木更津市の古墳とえば「金鈴塚古墳」であり、周辺の長須賀地域の前方後円墳などの首長墓群が有名です。しかし、請西地域においても古墳をはじめ、注目すべき遺跡が数多く発見されているのです。これまで長年に渡って発掘調査が行われ、非常に多くの報告書

が刊行されてきましたが、今回の市史編さん作業においてそれらを一つにまとめて紹介できるようにになりました。

千束台地区の高部古墳群には、市原市の神門古墳群（前方後円墳）と並ぶ房総地方最古の「前方後方墳」が含まれています。また、隣接する塚原地区と共に古墳時代終末期に至るまで大規模な古墳群・集落が形成されています。古墳時代中期の5世紀代には、集落の人々が祈りを捧げる「祭祀」が行われており、膨大な量の土器や石製・鉄製模造品がいくつか所に集中して発見されています。



古代部会

もし、時代をさかのぼって旅をすることができるとタイムマシンがあったらどうしますか。それでは、古代の奈良時代に時計をセッティングしてみよう。と言っても、木更津市も広いので、今回は今年できたばかりの木更津市役所朝日新庁舎から古代へ行ってみましょう。

まずタイムマシンのドアを開けて古代の風景を眺め、あなたがビックリするのは、まさきに目に飛び込んでくる山、山です。ここは海岸近くのはずなのにこんもりとした山がいくつも並んでいます。現在市役所の前にあるスポーツクラブの場所には四五m幅の正方形の松面古墳がありました。向かって左側には同じ大きさの塚の腰古墳と、さらに大きい稲荷森古墳が並んでいます。また右側少し離れたところには有名な金鈴塚古墳がありました。金鈴塚古墳は全長一〇〇mの前方後円墳で全国でも有数の古墳です。ここは長須賀古墳群と呼ばれ、古代の木更津を治めていた歴代の木更津の王たちの墓場でした。

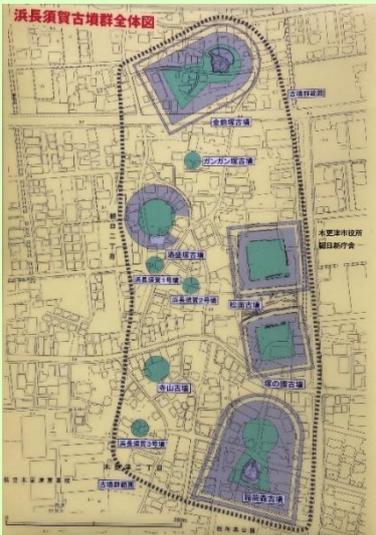


図1

(図1参照)

ではなぜこのような巨大古墳を木更津の王は造ったのでしょうか。明治大学名誉教授の吉村武彦氏は近著『ヤマト王権と難波・河内』（角川選書）で、これら海岸近くの古墳を海浜型前方後円墳と呼び、海上交通の要衝地に造って、自分たちの権力を可視化し、海からもはつきり「見せる」ランドマークとしたのだと言っています。木更津の王たちもヤマト王権の真似をしたことになりました。

この木更津の王たちは、七世紀まで「馬来田国造（まくたのくにのみやつこ）」と呼ばれていたようです。奈良県の七世紀末頃の藤原宮から「馬来田評（まくたのこおり）」という木簡が出てきたので、それがはつきりしました。しかし、ヤマト王権は中国の律令法を参考にした律令国家をめざし、全国の地方の国造（王）に、新しく「評造（こおりのみやつこ）」の地位を与えます。この「評」の字は後に「郡」に替わり、「郡司」と呼ばれます。もともとは小櫃川の流域全体を「国造」として治めていたのですが、王権の指示で上流と下流で二分割されます。その際、中国風に二字で地名を表記することを命じられ、下流は「望（もう）陀（だ）郡（ぐん）」、上流は「畔蒜（あびる）郡（ぐん）」とされました。現在の下郡付近で分割されたと思われます。

そこで古代にタイムトラベルしたあなたが、古代人から「おまえはどこから来たのだ」と問われたら、「望陀郡だ」と答えればいいのです。しかしさらに「おまえはこの郷（さと）の者だ」と聞かれるでしょう。望陀郡には、畔治（あはる）・表可・倉（くら）戸・飢富（おほ）・磐田（いわた）・河曲（かわわ）・鹿津（かつ）の七つの郷がありました。実はこの七郷は大字として残っている「飢富」（現飯富）以外はどこにあったのかはつきりしていません。

たとえば、「鹿津郷」などは、その読みが「かつ」という伝承もあり、国勝神社が残る袖ヶ浦市勝を比定地としていますが、古代の郷は五〇戸で構成され、戸籍調査によれば一般的に一郷五〇戸は千人規模で造られています。袖ヶ浦市の勝だけでは、郷域としては狭すぎます。また「鹿津」の表記には港を意味する「津」を使っていますが、勝は小櫃川からも袖ヶ浦の海岸地帯からも離れており、「鹿津郷」はもっと広い郷域であったはずで、現在袖ヶ浦市の海岸に「勝下」と書いて「かつおり」と読む地名が残っています。ここは国勝神社の祭礼の際、神輿を担いでこの海岸まで来たことによる命名で、ここまでするまで「鹿津郷」と範囲指定すれば、「津」を付けた謎が解けるのですが、その証拠があり

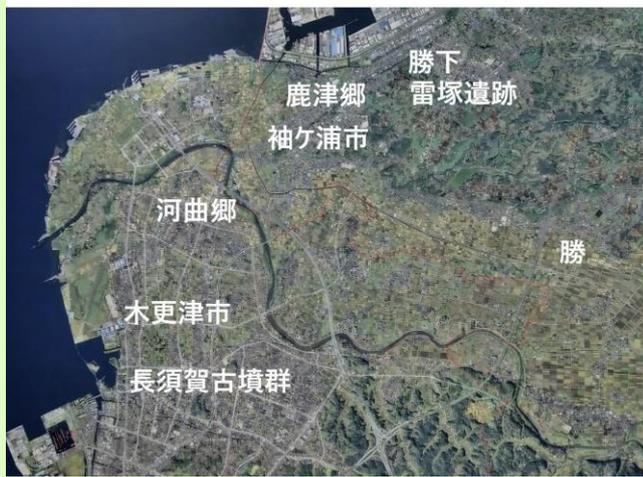


図2

ませんでした。しかし、近年「墨書土器」と言って、土器の側面や底に墨で郷名を書いたものはいくつか出土するようになって事情は変わってきました。袖ヶ浦市神納の「雷塚（らいづか）遺跡」（八世紀頃）から「勝」と書かれた墨書土器が出てきたのです。この遺跡は勝下の近くに長い地域を「鹿津郷」とすれば、千人規模の郷があったと証明できるのです。また、この郷は隣の海上（うなかみ）郡（市原市）との郡境を示すために設定された郷であったと思われれます。（図2参照）

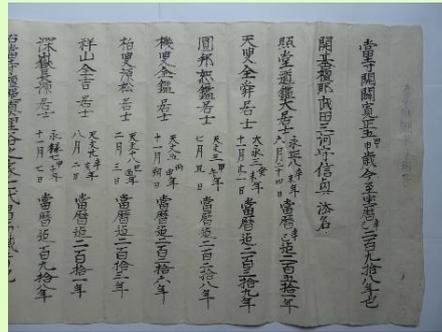
木更津市史なのに、袖ヶ浦市の話に終始して申し訳ありません。しかし、望陀郡内のこれらの郷名は平安時代初期に編さんされた『和名類聚抄（わみょうるいじゅうしよう）』に載っているもので、小櫃川河口右岸を含んだ「鹿津郷」が最後に来ていることから、『和名抄』の郷の記載順は、実は小櫃川の上流から下流に向けて書かれたものであると予想できるのです。では始めにもどって朝日新市庁舎付近で、古代の人におまえはどここの郷の者だと聞かれた時、私はこう答えます。「河曲郷の者だ」と。なぜなら、小櫃川右岸河口「鹿津」の一つ前に記載された郷が「河曲郷」で、その名前の通り小櫃川が大きく蛇行する左岸河口付近の郷だからです。現在の木更津市高柳から、朝日や長須賀までの一帯を示し、古代には内房線の海岸側は一面海が低湿地帯でした。だからタイムマシンの到着地点を設定する時にはあまり海寄りに設定はしないでくださいね。

付記 本稿は古代部会が実施した現地調査の一部を分かりやすく紹介したものです。また、一部に個人的な見解も含まれています。

中世部会

中世部会の独自の調査は今年度実施できなかったが、木更津市真如寺の仏像調査の際、合流する形で調査を実施しました。真如寺は

真里谷武田氏の菩提寺の一つとして有名ですが、近世以降数度の火災にあい、中世資料は全くないと予想していました。しかし、近世の史料の中に真里谷武田氏の系図を確認することができました。内容はほとんどが知られているものですが、知られていない情報を含み、この資料を含む今後の再調査に期待を抱かせる発見となりました。(資料1)



資料1

次に昨年度からの継続調査の報告です。岡の三柱神社にあった仏像銘文が真里谷武田氏関係のものではないか、ということから、まず所在調査を事務局にお願ひし、それが千葉県立中央博物館に収蔵されているものではないか、という情報をもとに調査を実施しました。はじめて銘文の現物に接したところで、まだ検討の余地が残されているが、特に資料2にみえる「旦那 源道存」は、上総武

田氏の嫡流で百首城主だった人物ではないか、という説もあるところから、今後さらなる検討が必要である、との認識を持つにいたしました。調査を実現できたことを関係各位に御礼申し上げたいと思います。



資料2

近世部会

令和七年度の近世部会の活動の中でも特筆できるのは、重田家文書の全貌を明らかにする作業に取り組んでいることです。

重田家文書は、「木更津船の由緒書」や「木更津村絵図」等々、江戸時代の木更津の様子を知るための一級史料として、古くからその存在が注目され、各種文献で紹介されてきました。しかし、これまで紹介されてきた重要史料や作成された目録にリスト化されている史料は、重田家文書全体のごく一部に過ぎず、それらの他にも膨大な史料が現存していることが、令和六年度に判明しました。その後、重田家文書は市に寄贈され、木更津市郷土博物館金のすずに保管されています。

そこで近世部会では、文書の発見直後から

史料整理（史料を専用封筒に入れて史料番号を付し、史料目録を作成してリスト化する）・写真撮影作業に着手し、現在に至っています。その結果、重田家文書は、これまで知られてきた史料（二〇六点）の他に、数百千点以上の未整理史料から成っていることが判明しています（正確な数量については今後ご報告できるような作業を進めて参ります）。

重田家文書は、すでに言及したように、木更津の近世を理解する上で、大変豊かな内容を持つている文書群であることは間違いありません。このことは、『千葉県史料 近世編 上総国 下』（千葉県、一九六一年）や『木更津市史』（一九七二年）、『図説木更津のあゆみ』（二〇一二年）などを参照すれば一目瞭然ですが、現在行っている整理作業の中でも多くの貴重な史料が見いだされています。二〇二六年に入ってから目録を作成した部分に限り、いくつかの史料をご紹介します。

まず、江戸時代の木更津村にとって人やモノを運ぶ廻船は極めて重要な産業だったと考えられますが、そうした廻船業を担った船持の人々の営業の実態を知りうるのが「乍恐以書付奉申上候（木更津村船持伝兵衛の往還稼ぎ方お尋ねへの回答）」という史料です。ここからどのような船持ちたちの姿が浮かび上がってくるのか、分析を進めて参ります。

また、近世後期の徳川幕府による地域支配のあり方を理解することができるとして、大小惣代并道案内御調 道案内人之願書（関東取締御出役馬場俊蔵様宛、元治元年一八六四）、「御取締申渡写」（天保一五年一八四四）等々、多くの史料も見いだされています。後者からは、当時の重田家当主嘉右衛門が「木更津村社倉見廻役」だったことも分かります。飢饉等に備えた貯穀施設である社倉の管理も重田家が担っていたのです。また、重田家文書には、『伊豆七島全図』や『滑川談（古世盛衰述意）』などの版本、さらに、幕末期に起きた木更津村での打ちこわしの実態を明らかにするものと見られる「紛失米穀取捨取集書上」といった様々な史料が含まれています。

このような重田家文書の分析によって、木更津の近世はどのように見えてくるのか。地域の歩みを豊かに描きだし、多くの方にお届けできるように、引き続き努めてまいります。

民俗部会

「活動報告」で述べたように、民俗部会の調べていることはたいへん多岐にわたりますが、その中で、お寺や神社での調査と、「講」・古文書の調査についてご紹介します。

令和七年度には一月の永井作・善光寺の「愛宕様」を見学させていただいたのを皮切

りに、根岸の光厳寺本堂内での檀家の方々からの聞き取り、四月の曾根・釋蔵寺の「仏生会」（花まつり）の見学など、各地域のお寺の行事の調査を始めました。その際には、ご住職や檀家さんから、行事のことだけではなく、むかしのお葬式やお墓についてもお話をうかがうことができました。また、お寺に保管されている古文書の写真撮影や、法具類、仏像も拝観させていただくことができました。

神社の祭礼も、九月の富来田地区をはじめ、十二月の桜井・御嶽神社の「星祭り」、一月の金田・中島の「梵天立て」などに参加させていただき、お話をうかがいました。

また、お寺や神社だけでなく、市内の各地域のさまざまな「講」について見学させていただきました。今でも行われている講、コロナ禍でやめてしまった講、何十年も前に途絶えた講……。それらの講についても民俗部会では調査しています。

令和六年度から小浜地区の地藏堂でお話をうかがっている中で、「百万遍」「おこうしんさま」「うらぼん」「かんのんこう」を行っていることがわかり、「百万遍」と八月の「うらぼん」に参加させていただきました。「うらぼん」は「盂蘭盆会」という仏教の行事ですが、海に面していた小浜では、特に「浦」で亡くなった人の供養のため、という意味合い

が濃いようで、むかしは海辺で行っていたそうです。



小浜地区でのうらぼんのようす

令和七年度からうかがっている江川地区では、「お寺に『六道帳』がある」と聞いたことから、区長さんや総代さんにご協力いただき、光明寺での調査が始まりました。六道帳というのは、土葬が行われていた時代に埋葬する穴を掘る順番などを記録した帳面で、葬列に持つ道具の作り方や、葬儀に準備するものなども書かれていることがあります。

光明寺にはいくつものズシの六道帳、百万遍の道具・法具、出羽三山の講の帳面や行人の持つ法螺貝などや、数多くの掛け軸（講の御本尊）が納められており、それらの写真撮影を許可していただきました。また、境内のお堂や石仏、地域の神社、墓地の見学も行っています。これらを調べながら、地元の方からお話を伺うのも大変重要です。

古文書や道具は家に眠っている場合も多いので、民俗部会では他の部会、特に近現代部会建築班と連携して、建物調査の際に家の持ち主と協力して発見に努めております。

そのようにして見つかった古文書は、編さん事務局で拝借できる場合には、委員が手分けして整理作業を行っています。捨てられてしまったものは、もう二度と元に戻すことは出来ません。古そうな物を見つけたら、まずは市史編さん事務局（文化課）にご連絡をお願いいたします。



江川地区 講関連の道具

お知らせ 刊行物のご案内

木更津市史編さんに関する刊行物を文化課で販売しております。

『木更津市史 自然編 資料』（A四版本文千二百六十七ページ三分冊箱入）一〇、〇〇〇円
内容市内の動植物のカラー写真が多数掲載されており、木更津市の自然を知るには最適です。

『木更津市史 史料編4 古代』（A四版本文二八〇ページ）三〇〇〇円
内容木更津市周辺地区の古墳時代から平安時代までの資料を読みやすく年代順に掲載した資料集です。新資料や簡単な解説、豊富な口絵も 見どころとなっています。

『市制施行七〇周年記念図説木更津のあゆみ』（A四版本文二七四ページ）二〇〇〇円
内容木更津の歴史・文化・自然を写真や図版を多く使ったわかりやすく解説しています。

『木更津市史研究』創刊号（A四版本文一〇二ページ）五〇〇円
内容「勤王の歌人・斎藤昌麿と安政の大獄」実形裕介、「木更津市域への空襲の実相に迫る」栗原克榮、「木更津の獅子まきについて」(田村勇)、「震災後の希望の学舎」(渡邊義孝)、「関東大震災復興から見た金田小学校校舎」(高木澄子)、「木更津市の陸生爬虫類」(成田篤彦)、「東京湾小櫃川河口干潟のシオマネキについて」(相澤敬吾)、「木更津市の魚類ハゼ亜目」(田村満)

第二号（本文一〇八ページ）五〇〇円
内容「中世における木更津と本牧の交流(上)」(盛本昌

広)「江戸時代における木更津市域の教育環境(上)」(川崎史彦)「日露戦争後の地域社会」(池田順)木更津県における育児救済政策資料からの一考察」(駒早苗)「浸透実験池の水質の特徴とカワウコロニーがその水質に与えた影響について」(湯谷賢太郎)「木更津市の蝶」(相澤敬吾)「木更津市の汽水・海水魚」(田村満)「木更津市の両生類」(成田篤彦)

第三号（本文六八ページ）五〇〇円
内容「中世における木更津と本牧の交流(下)」(盛本昌広)「江戸時代における木更津市域の教育環境(下)」(川崎史彦)「木更津市のバツタ目」(成田篤彦)「木更津市のサクラ・見分け方と生育地」(木暮文雄)

第四号（本文八四ページ）五〇〇円
内容「松本栄子と彼女をめぐる人々」(駒早苗)「百年前のパンデミック」(スペイン・インフルエンザ)と地域」(栗原克榮)「房総の郷土史家小熊吉蔵とその生涯」(文化課)「木更津の獅子神楽舞について」(田村勇)「金鈴塚古墳石室・石棺のSEM/MS三次元計測」(本間岳人)「木更津市のカメムシ目」(成田篤彦)

第五号（本文一九六ページ）五〇〇円
内容「鎌倉時代の畔蒜庄」(盛本昌広)「木更津市のヤマトケルとオトタチバナヒメ伝説」(入江英弥)「木更津の地名1(吾妻、木更津1・2、貝渕、桜井)」(田村勇)「八剱八幡神社例大祭運営奉興

を通じてみる町づきあいの諸相(和田健)「諏訪谷横穴墓群出土人骨から考察する被葬者について」(谷畑美帆・神澤秀明・角田恒雄・原山ボーロン崇)「アシハラガニの生活」(相澤敬吾)「木更津市の南方系昆虫やカニ類の侵入と生息状況」(成田篤彦)「維管束植物分布合同調査の概要」(木暮文雄)

第六号(A四版本文五十一ページ)五〇〇円内
 容「諏訪谷横穴5号墓より出土した中世人骨について」(谷畑美帆)「木更津市内および付近を流れる小櫃川の近世以降の流路変遷」(湯谷賢太郎)「木更津市の淡水魚」(田村 満)

第七号(A四版本文八十六ページ)五〇〇円内
 容「西上総における弥生時代〜古墳時代前期の土器編年」(小沢洋・加藤修司)「小櫃川河口湖計画とモデル河口湖調査」浸透実験池とは何か〜(湯谷賢太郎)「木更津市の鳥類1(陸鳥)」(田村満)

『木更津市史編さん事業公開講座記録集』平成二十六〜二十八年年度版(A四版本文九〇ページ)五〇〇円内
 容「盤洲干潟のいきものたち」
 「中世〜戦国時代 江戸湾をめぐる武田氏 戦国時代の木更津と真里谷武田氏」
 「市史を編さんするということ」
 「こんな身近に宝があった!」
 「木更津の古民家・近代建築をたずねて〜」

『木更津市史編さん事業公開講座記録集』平成二十九年年度版(A四版本文三二二ページ)五〇〇

円内
 容「暮らしから見つける木更津の文化資源」
『木更津市史編さん事業公開講座記録集』平成三十年年度版(A四版本文十五ページ)五〇〇円
 内容「明治150年記念木更津地域から見た明治」

その他のお知らせ

木更津市史デジタルアーカイブを公開しています。

令和6年度刊行の『木更津市史 自然編 資料』を公開しています。また、木更津市史編さんで調査した歴史資料も公開しています。

内容は、千葉県指定有形文化財の「天正検地帳」などの画像と翻刻文、戦国時代の城跡である真里谷城跡、天神台城跡、要害城跡の陰陽図です。いずれもこちらの二次元コードからアクセスできますので、ぜひご覧ください。(無料)

(事務局)

公開URL: <https://adeac.jp/kisarazu-city/>



木更津市史公開講座をきさらづ市民カレッジと共催で3回開催しました。

第1回七月十九日(土)

講師:木更津市史編さん部会委員(考古部会)

加藤修司(かとう しゅうじ)氏

演題:古代房総半島の最先進地域「木更津」

あなたの地域にこんなすごい遺跡があった

第2回十一月八日(土)

講師:木更津市史編さん部会委員(中世部会)

滝川 恒昭(たきがわ つねあき)氏

演題:木更津の戦国時代 上総武田氏・里見氏・

北条氏の興亡

第3回十二月六日(土)

講師:木更津市史編さん部会委員(近世部会)

早川仁愛(はやかわ にちか)氏

演題:蔵書としての一枚摺り 下郡村名主の事

例から

※会場は、いずれも 中央公民館多目的ホール

編集後記

このたび、「木更津市史 編さんだより」第10号を発行します。

令和7年度は、「史料編8 近現代1」の刊行に向けて、市史編さんに係る調査・研究をまとめ、原稿作成に取り組みました。今後更にも刊行を進めていきます。

なお、編さんだよりは、市のホームページでもご覧いただけますので、ご利用ください。

(事務局)

